

第6章 研究活動と研究環境（学部・院）

（研究活動）

A群・論文等研究成果の発表状況

（教育研究組織単位間の研究上の連携）

A群・附置研究所とこれを設置する大学・大学院との関係

（経常的な研究条件の整備）

A群・個人研究費、研究旅費の額の適切性

A群・教員個室等の教員研究室の整備状況

A群・教員の研究時間を確保させる方途の適切性

A群・研究活動に必要な研修機会確保のための方策の適切性

研究活動

本学における研究活動、ならびに研究環境に対する基本的な考え方は、概ね以下の各事項を目標として今日に至っている。また、文化人類学科・臨床心理学科・現代社会学科いずれも実証的研究が特に求められるため本学における研究活動、研究環境に対する諸施策は、これらの特性に有効な施策となることを主眼に設けている。本章では、これらの観点より点検・評価を行う。

各教員の学外における積極的な研究活動を奨励する。

人間学研究所、心理臨床センターの諸活動および各種学内紀要の発行等を通し、人間学部総体としての学際的研究活動を推進する。

海外での調査研究活動を積極的に奨励し、その成果を所属各学科に還元する。

附置施設の行う公開セミナー等を通じ、学内の知見を地域で活用する。

教員の研究活動を保証する学内諸制度を漸進的に整備する。

1. 研究活動の現状

（1）研究成果の発表状況

教員の研究活動において通常最も期待されるべき事項は、著書刊行、学会誌等への論文投稿と掲載、そして学会発表であるのは論を俟たない。大学教員の実質的な研究活動の進展状況を測定する目安としては、最も明確な指標と言える。

いわゆる教員業績の全容をここに紹介することは紙面の都合上困難なため、その詳細に関しては、別途添付資料「2003年度教員研究活動報告書」上の各専任教員の〔研究業績〕欄を参照されたい。

なお、特記すべき事柄として、本学人間学部の性格上、本学教員の多くが世界各地における各種調査活動に精力的に取り組んでいることがあげられよう。かかる活動の蓄積と果実が学内における教育・研究活動に好ましい影響をもたらしていることは本学の大きな特徴と言える。こうした調査活動の状況に関しても「2003年度教員研究活動報告書」上の〔調査活動〕欄を参照されたい。

（2）科学研究費補助金利用による研究状況

各教員にとって最も馴染みのある学外公的研究資金と言える、文部科学省科学研究費補助金の本学における実際の交付状況は以下のとおりである。

科学研究費補助金交付状況表

()内の数字は交付額・単位千円

交付年度	文化人類学科	臨床心理学科	現代社会学科
1996年度	国際学術研究 1件 (7,900)		2004年度 から設置
1997年度			

1998年度	国際学術研究 2件 (11,100) 基盤研究(C)(2) 1件 (1,400)	基盤研究(C)(2) 1件 (1,200)
1999年度	基盤研究(C)(2) 2件 (2,200) 奨励研究(A)(2) 1件 (900)	基盤研究(C)(2) 1件 (1,200)
2000年度	基盤研究(C)(2) 2件 (1,700)	基盤研究(C)(2) 1件 (1,000) 奨励研究(A)(2) 1件 (900)
2001年度	基盤研究(C)(2) 1件 (900)	
2002年度	基盤研究(C)(2) 2件 (2,500) 若手研究(B)(2) 1件 (1,300)	
2003年度	基盤研究(B)(2) 1件 (4,300) 基盤研究(C)(2) 2件 (1,800) 若手研究(B)(2) 1件 (1,000)	基盤研究(A)(1) 1件 (5,980) この内間接経費 (1,380)
2004年度	基盤研究(B)(2) 1件 (3,400) 基盤研究(C)(2) 1件 (800) 若手研究(B)(2) 1件 (800)	基盤研究(A)(1) 1件 (6,500) この内間接経費 (1,500)
計	のべ全 20件 42,000千円	のべ全 6件 19,660千円

競争的研究資金であるため、当然のことながら申請を行っても採択されない場合がある。しかし、学外研究資金の獲得については近年の大学運営にとって極めて重要な課題であり、科学研究費補助金公募申請を一律に教員に義務づける研究機関も存在する現状を鑑みると、本学においても科学研究費補助金受給の奨励をはかっていく必要がある。

公表されている2004年度の科学研究費補助金配分状況一覧表(新規採択分)によれば、全ての研究種目を合計した採択率は24.8%であるので、以下に記載した本学の新規採択状況(H9-16累計)19.30%は、まだまだ改善の余地のある数字であろう。

科学研究費補助金公募申請新規採択状況表

申請年度	文化人類学科			臨床心理学科			全学		
	申請数	採択数	採択率 %	申請数	採択数	採択率 %	申請数	採択数	採択率 %
1997年度	4	0	0.00	4	0	0.00	8	0	0.00
1998年度	7	3	42.86	8	1	12.50	15	4	26.67
1999年度	3	1	33.33	2	0	0.00	5	1	20.00
2000年度	1	0	0.00	9	1	11.11	10	1	10.00
2001年度	4	1	25.00	4	0	0.00	8	1	12.50
2002年度	3	2	66.67	4	0	0.00	7	2	28.57
2003年度	1	1	100.00	1	1	100.00	2	2	100.00
2004年度	2	0	0.00	0	0	0.00	2	0	0.00
1997-2004 累計	25	8	32.00	32	3	9.38	57	11	19.30

(3) その他の学外研究資金への応募状況

日本学術振興会・文部科学省による科学研究費補助金以外の公的学外研究資金として、日本私立学校振興・共済事業団、(財)私学研修福祉会、その他民間のものを含めて各種の助成金制度がある。

現在のところ科学研究費補助金以外の学外研究資金に対しては、積極的な応募までには至っていないが、東京財団による「2004年度委託研究」募集(全国5名が受給)に申請した本学臨床心理学科教員が、2004年3月に助成内定の通知を受けたことは、たいへん喜ばしい出来事であった。今後とも、積極的な公募申請がこのような事例に続くことを願ってやまない。

(4) 紀要等の発行状況

1) 人間学研究所紀要「人間学研究」

人間学研究所では、当研究所が実施した各種講演会・シンポジウム、あるいは前述の各種共同研究プロジェクトに係る報告と記録、ならびに本学人間学研究所員等による論文・研究ノート等の投稿原稿を掲載する人間学研究所紀要「人間学研究」を1999年・2000年・2002年・2003年の合計4回発行してきた。

当研究所の各種活動によって得られた知見を広く内外の識者に問い、ひいては本学の研究活動を社会に還元することを目的としている。以下に第4刊までに掲載された論文等のタイトルのみを記す。

「人間学研究」に投稿された論文等のタイトル一覧

年度	巻	種別	タイトル・内容	執筆者
1999	Vol.1	論文	人的拡散としてのグローバリゼーションー日本の事例	ベフ・ハルミ
1999	Vol.1	論文	ペンフィールドの視覚と聴覚経験の再現性の業績の分析並びに臨死体験のネットワークモデルの提案	森 忠 三
1999	Vol.1	論文	仏典に説かれる「母子相姦」説話 -インド原典とその中国・日本の変容-	平岡 聡
1999	Vol.1	論文	The globalization of Japanese New Religions as illustrated by the case of Sukyo Mahikari	Wendy A. Smith
1999	Vol.1	シンポジウム 記録	グローバル化する日本の宗教	井上 順孝・SMITH, Wendy 中牧 弘允・宮永 団子 別府 春海
1999	Vol.1	シンポジウム 記録	Globalization Workshop	Harumi Befu, Ulf Hannerz Michael Feather Stone Brian Moeran, Jerry Eades Tom Gill, Eyal Ben-Ari Makiko Morikawa, Yumiko Tokita-Tanabe Bill Bradly, Kosbo Ikoma Junko Sakai, Saya Shiraishi
1999	Vol.1	シンポジウム 記録	生命のリズムー倒れて後に思想を語る -	鶴見和子・ベフ・ハルミ・ 樋口和彦・道浦母都子・ 西川千麗・高橋千鶴子・ 中村佳子
1999	Vol.1	シンポジウム 記録	Forms of Creativity: Reading Tsurumi Kazuko Reading Minakata Kumagusu	Tom Gill
1999	Vol.1	シンポジウム 記録	Forms of Creativity: Comparative Forms of Creativity among Japanese Folklorists-And What I Learned from them-	Kazuko Tsurumi
1999	Vol.1	講演記録	21世紀の人類像	梅 棹 忠 夫
1999	Vol.1	講演記録	人間性の三次元：特に悪の次元について	星 野 命
1999	Vol.1	講演記録	ナラティブ・セラピーについて：フィールドワークとの接点	野 村 直 樹
1999	Vol.1	共同研究班 研究報告	宗教と癒し	安田 ひろみ
1999	Vol.1	共同研究班 研究報告	身体・アイデンティティ・空間をジェンダーで読む	鶴 飼 正 樹
1999	Vol.1	共同研究班 研究報告	脳とこころ	森 忠 三
1999	Vol.1	共同研究班 研究報告	パフォーマンス・アナリシスの手法 ー臨床心理学と文化人類学の対話	白 石 さ や
1999	Vol.1	共同研究班 研究報告	仏教説話と臨床心理学	高 石 浩 一
1999	Vol.1	共同研究班 研究報告	文化研究と人間研究の地平を超えて	小 林 康 正
1999	Vol.1	共同研究班 研究報告	グローバル・ジャパン	ベフ・ハルミ
2000	Vol.2	論文	チャンクの響く街ウトロ -地域社会との共生をめぐる在日韓国・朝鮮人の模索-	金 基 淑
2000	Vol.2	論文	仏教説話に見る母子相姦の変遷	高 石 浩 一
2000	Vol.2	論文	崇仁地区の新しいまちづくり - その前夜祭囃子に引き寄せられて -	竹 口 等
2000	Vol.2	論文	英語学習者に留学を促す情報と異文化接触 - アメリカの語学学校で学ぶ日本人に関する予備的報告 -	竹 内 裕 子
2000	Vol.2	論文	アジア系移住者とIT ー日本における「情報化」の新展開と「情報人類学」への覚書	谷 口 裕 久
2000	Vol.2	論文	柳田民俗学の組織化ー橋浦泰雄絵画頒布会に見る	鶴 見 太 郎
2000	Vol.2	論文	インフォームド・コンセントの研究 第2報 治療する可能性のない癌の告知に関する調査	森 忠三・泉 信夫・ 西岡研哉・服部律子
2000	Vol.2	講演記録	海外から日本を理解する 『グローバル化する日本のマンガ・アニメ産業』	白 石 さ や
2000	Vol.2	講演記録	To Understand Japanese Society and Culture is to go "International": Emergence of 'Japaneseness', in Yaohan Hong Kong	Dr Dixon H.W.Wong

2000	Vol.2	共同研究班 研究報告	食・養生・佛教 - 「食と癒しの文化」プロジェクトの途上にて	鈴木七美・寺崎弘昭・ 周 禅鴻
2000	Vol.2	共同研究班 研究報告	生と死をめぐる学際的研究	安田 ひろみ
2000	Vol.2	共同研究班 研究報告	脳とこころ	森 忠 三
2000	Vol.2	書 評	『宗教と癒し—救いの手がかりを求めて』 (「宗教と癒し」研究会編著)	星 野 命
2002	Vol.3	公開講演 ・シンポジウム	『日本文化論の昨今』—外国から見た場合と日本から見た場合—	ベフ・ハルミ
2002	Vol.3	公開講演 ・シンポジウム	『家族における父親』1. 父という余分なもの	山 極 寿 一
2002	Vol.3	公開講演 ・シンポジウム	『家族における父親』 2. 精神分析の父としてのフロイトと父親のあり方	妙 木 浩 之
2002	Vol.3	公開講演 ・シンポジウム	『家族における父親』ディスカッション	山極 寿一・妙木 浩之
2002	Vol.3	公開講演 ・シンポジウム	「家族における父親」の感想	阪 彩子・村井 陽之
2002	Vol.3	公開講演 ・シンポジウム	『京都の都市伝統の創造性と変革性』 - 大文字五山送り火をめぐるべくとくに左大文字を中心に -	和崎 春日・伊藤 唯真
2002	Vol.3	論 文	博物館の展示とアメリカ・インディアン	青 柳 清 孝
2002	Vol.3	論 文	従来の死と脳死—脳死の講義と学生の反応 -	森 忠 三
2002	Vol.3	論 文	ハンディクラフトからみるインドのチベット社会 - カルナータカ州パイラクツベ・コロニー報告 -	杉 本 星 子
2002	Vol.3	論 文	初回面接の方法論—心理臨床における「聴き方」 -	高 石 浩 一
2002	Vol.3	論 文	人が人肉を食べてはいけない理由 - インド仏教の食倫理 -	平 岡 聡
2002	Vol.3	共同研究班 研究報告	「京都論」 - 2001 年度研究活動報告—	「京都論」共同研究班
2002	Vol.3	共同研究班 研究報告	「食と癒しの文化」 - 2001 年度研究活動報告—	安田 ひろみ
2003	Vol.4	論 文	ブッダは眠らない インド仏教談話に見られる『夢』の事例	平 岡 聡
2003	Vol.4	論 文	絶対音感の教育と聴覚系・脳の機能	森 忠 三
2003	Vol.4	公開講演 ・シンポジウム	夢は『自然』か『文化』か： スーダンのある社会の事例から人類の夢のナゾを考える	岡 崎 彰
2003	Vol.4	公開講演 ・シンポジウム	シンポジウム「集まって暮らす ジェンダーをひらこう」	平岡モト子・篠原 聡子、 森 正美・三林 真弓、 山田 尊志・西川 祐子、 杉本 星子
2003	Vol.4	記 録	日野舜也先生座談会～北海道編	鷓 飼 正 樹
2003	Vol.4	共同研究班 研究報告	共同研究「学園ミュージアムを考える」活動報告	上田 富士子
2003	Vol.4	共同研究班 研究報告	共同研究「ニュータウンの未来像」活動報告	西川祐子、三林真弓
2003	Vol.4	共同研究班 研究報告	共同研究「異文化としての内なる『古い』」活動報告	鷓飼正樹、高石浩一

2) 心理臨床センター紀要『臨床心理研究』

心理臨床に係る研究機関として期待される活動における発表の場として、心理臨床センター紀要『臨床心理研究』(創刊準備号)を1998年3月末に刊行した。その後毎年3月末に順調に発行を重ね、現在第6号まで発刊している。

紀要の内容には心理臨床に関わる事例研究等が含まれるため、基本的には心理臨床に携わる専門家・専門機関に限定して配布されている。当然の事ながら、事例研究上に記述される関係者の秘密保持に関しては、厳格な学内基準を設けたうえで研究発表が行われている。

前述の理由により、投稿された論文内容等に関してはここでは紹介できないが、発行を重ねるに連れ、本紀要は本学臨床心理学科教員にとりますます重要な研究発表の場として、位置づけられてきている。

3) 人間学部紀要『人間・文化・心』

人間学部教員の研究発表の場として、1998年7月に標記紀要・第1集が刊行された。その後、2004年度の第7集まで発刊されている。

当紀要への論文投稿に際しては2名の学内レフリーによる査読を必要とし、一定の学術水準を保つべく、別途組織された「学部紀要編集委員会」によって詳細な編集作業が行われている。

投稿論文等の種別は「論文」と「研究ノート」に大別されるが、後者に関しては萌芽的段階の研究活動報告をまとめたものである。以下に第7集までに掲載された論文等のタイトルを記す。

人間学部紀要「人間・文化・心」論文等タイトル一覧

年度	刊	種別	タイトル	執筆者
1998	Vol.1	論文	河口慧海への評価と人間関係	高山 龍三
1998	Vol.1	論文	Divyavadana が強調する業の側面とその背景	平岡 聡
1998	Vol.1	論文	聾の両親をもつ1歳聴児の保育園入園後1年間の言語発達	清水 佐保子
1998	Vol.1	論文	「異類女房」としての綾波レイ(『新世紀エヴァンゲリオン』)とサン(『もののけ姫』)	秋田 巖
1998	Vol.1	論文	自閉症児の親の心理的危機の要因と対処法に関する試論 - ABCX モデルを適用した事例検討 -	岡田 珠江
1998	Vol.1	論文	不登校児に対する大学生の家庭訪問による援助活動に関する一考察 - 学生の組織作りを中心として -	香川 克
1998	Vol.1	論文	老死をめぐる：アメリカ宗教界の対応	生駒 孝彰
1998	Vol.1	論文	シンガポールの教員養成 - 日本との比較 -	日野 克美
1998	Vol.1	論文	ドイツにおけるクルド文化紹介行事に見る「文化的自画像」 - 客体化の言説と差異の問題 -	石川 真作
1998	Vol.1	論文	「主体」への回帰は成功するか カリブ研究からの視点	大杉 高司
1998	Vol.1	論文	英国系人類学からみた日本 - リーチの「動物カテゴリー」を例として -	Gill, Tom
1998	Vol.1	論文	雲南省における漢族の「五郎神」信仰について	谷口 裕久
1998	Vol.1	論文	トルコの村の家族構成と女佐 - 西黒海地方O村の事例より -	中山 紀子
1998	Vol.1	論文	心拍のゆらぎと自律神経活動に関する研究： 第2報 日内変動と座位・臥位・腹式呼吸の負荷の分析	森 忠三 安本 義正
1998	Vol.1	論文	高校女子サッカー選手における各種の走能力とゲーム中に発揮された各種の移動距離との関係について	石居 宜子 成山 公一
1998	Vol.1	論文	What Maisie Knew 試論 - メイジーとその仲間たちの「別れ」を中心に -	中窪 靖
1998	Vol.1	研究ノート	「橋浦泰雄関係文書」について	鶴見 太郎
1998	Vol.1	研究ノート	論理療法における異文化適応を援助する可能性	吉元 洪
1998	Vol.1	研究ノート	高等教育における基礎教育のあり方と必要性	中村 博幸
1998	Vol.1	研究ノート	シカゴのインディアン - 転住の個人史と援助組織	青柳 清孝
1998	Vol.1	研究ノート	非正統治療者モーリス・メッセゲの植物治療 - 南仏ガスコーニュ地方植物民俗療法の現在 -	鈴木 七美
1999	Vol.2	論文	グローバリゼーション論再考	別府 春海
1999	Vol.2	論文	スウェーデンの村落サークル活動 - ダーラナ地方レクサンド市を中心として -	古川 まゆみ
1999	Vol.2	論文	周縁部漢族社会における生活変化の社会的意味 川西南中国の農民男子の選択	谷口 裕久
1999	Vol.2	論文	大都市のマージナルな男たちの比較研究： 日本の「寄せ場」、アメリカのスキッド・ロウ	Gill, Tom
1999	Vol.2	論文	米国における学校での心理職の業務に関する調査研究 - 日本におけるスクールカウンセリングへの適用の可能性を検討する -	岡田 珠江
1999	Vol.2	論文	日中のことばから捉えた文化と神経症	吉元 洪 酒木 保
1999	Vol.2	論文	聾の両親をもつ健聴児の言語発達 - 1歳で保育園に入園したM児の入園2年目 -	清水 佐保子
1999	Vol.2	論文	アモルフラス自我構造からみた臨床実践	鐘 幹八郎
1999	Vol.2	論文	心理療法プロセスのファンタジーとしての「相互作用場」と「サトル・ボディ」	名取 琢自
1999	Vol.2	論文	心拍のゆらぎと自律神経活動に関する研究：第5報 日内変動の1年後の再現性	森 忠三・安本義正 岩平 滋子
1999	Vol.2	論文	British Teachers and Their Student Teachers on the Oxford Internship Scheme	HINO, Katsumi
1999	Vol.2	論文	The Tomatis Method English Class : Lessons Learned and Possible Applications	BOND, Lisa Gayle
1999	Vol.2	論文	「同和」地区児童・生徒の学力実態とその学力規定要因研究が問いかけるもの - 2002年同和対策事業の廃止と学校改革を目前にして -	竹口 等
1999	Vol.2	論文	死の告知と死をめぐる：日本宗教界の対応	生駒 孝彰
1999	Vol.2	論文	契約労働者からインド・モーリシャンへイギリス議会文書・植民地報告(1862 - 1882)にみるモーリシャスのインド系移民 -	杉本 星子
1999	Vol.2	研究ノート	<癒し>関連語彙の系譜学一癒しという営みの内包と外延 -	鈴木 七美
1999	Vol.2	研究ノート	シカゴのマグネット・スクール - 人種統合への模索 -	青柳 清孝
1999	Vol.2	研究ノート	「橋浦泰雄関係文書」について(続)	鶴見 太郎
2000	Vol.3	論文	チェルノブイリ原発事故による放射能被災者の心理的影響に関する研究(1)	鐘 幹八郎
2000	Vol.3	論文	安楽死をめぐるアメリカ宗教界の対応	生駒 孝彰
2000	Vol.3	論文	Oral Interviews in an English Communication Program A Pilot Study at Kyoto Bunkyo University	Elizabeth A. King
2000	Vol.3	論文	大学での学習をサポートする教育に関する一考察 - 学習レディネスの欠如とサポート講座 -	中村 博幸
2000	Vol.3	論文	KBU 英語教育実践の背景と実践結果	日野 克美
2000	Vol.3	論文	心拍のゆらぎと自律神経活動に関する研究：第7報 スポーツ選手における腹式呼吸の影響	成山公一・森 忠三 安本義正・岩平滋子
2000	Vol.3	論文	供物を通してみたバラモン教のパンテオン - 『家庭経(Grihya-Sutras)』を中心に -	金 基淑
2000	Vol.3	論文	韓国における盲人占卜者の現況 - 擬制的親族組織「門生」を中心に -	安田 ひろみ

2000	Vol.3	論文	Two Year Evaluation of Kyoto Bunkyo University's Tomatis Method English Program	BOND, Lisa Gayle
2000	Vol.3	論文	スクールカウンセリング活動におけるウチとソトの問題	岡田 珠江
2000	Vol.3	論文	A Study of Roderick Hudson: On What Caused the Hero's Death	NAKAKUBO, Yasushi
2000	Vol.3	論文	日中の比較によるブリーフ・システムと学校適応に関する研究	吉 元 洪
2000	Vol.3	論文	「郷土会」再考—近代日本の「郷土」の複数起源 -	鶴見 太郎
2000	Vol.3	論文	高等教育機関におけるアフターマティヴ・アクション実施を巡る一考察 - カリフォルニア州住民提案 209号を中心に -	竹内 裕子
2000	Vol.3	研究ノート	都市インディアンと公立学校教育 - アーバカーキーとシカゴの事例 -	青柳 清 孝
2000	Vol.3	研究ノート	ALTの目から見た日本の英語教師とJETプログラム	日野 克 美
2000	Vol.3	研究ノート	スウェーデン人の心のふるさと? : ダーラナ地方に関するアンケート調査から	古川 まゆみ
2000	Vol.3	書評	Ekai Kawaguchi: The Trespassing Insider by Abhi Subedi	高山 龍 三
2001	Vol.4	論文	チェルノブイリ原発事故による放射能被災者の心理的影響に関する研究(2)	鐘 幹 八 郎
2001	Vol.4	論文	ファッションング・マラガシイ - マダガスカル・ファッションと近代的身体の形成 -	杉本 星 子
2001	Vol.4	論文	教職課程におけるカリキュラムの構造化	中村 博 幸
2001	Vol.4	論文	日本人にとっての英語習得と通過儀礼	日野 克 美
2001	Vol.4	論文	アメリカ合衆国における多様性・公平の実現 - 高等教育機関におけるアフターマティヴ・アクション評価をめぐる -	竹内 裕子
2001	Vol.4	論文	戦後(1945年以後)の都市文化の変化と流行 - 戦後社会史のなかで -	日野 舜 也
2001	Vol.4	研究ノート	米国 N.Y.州の高校における AIDS 教育 “Teen Task Force”の活動調査研究	成 山 公 一
2002	Vol.5	論文	新生殖技術への社会文化的対応の国際比較(1) スイス・フランスにおける実践と諸問題	鈴木 七 美
2002	Vol.5	論文	ソーシャルサポートの功罪 - 不登校児の母親を対象としたインタビュー調査より	三 林 真 弓
2002	Vol.5	論文	Generation X : Considerations for Teachers in a Globalized Japan	Elizabeth A. King
2002	Vol.5	論文	超能力を持った六人家族の繁栄とその因縁譚 - 『デイヴィヤ・アヴァダーナ』第9-10章和訳 -	平 岡 聡
2002	Vol.5	論文	「ニュータウンの人類学」の可能性	西川祐子・杉本星子 森 正 美
2002	Vol.5	論文	京都文教大学オリジナルグッズ「學茶」 - 「日本茶に関するアンケート」から -	竹内 裕子
2002	Vol.5	論文	Maxine Hong Kingston's The Woman Warrior and Her Deconstruction To the Chinese Traditional Patriarchy	LU, Jun (陸 君)
2002	Vol.5	研究ノート	ラフカディオ・ハーンの「日本 - ある解釈の試み」の「付録」について	遠藤 みどり
2002	Vol.5	研究ノート	河口慧海と日本ネパール文化交流とはじめ 2002年ネパール報告	高山 龍 三
2003	Vol.6	論文	チェルノブイリ原発事故による放射能被災者の心理的影響に関する研究(3) - 成人・青年被爆者の心理学的検査の結果について -	鐘 幹 八 郎
2003	Vol.6	論文	「家」をつなぎとめる - 近代民間学としての「家系調査」	小 林 康 正
2003	Vol.6	論文	「交流」から「混流」へ - 文化人類学的手法によるまちづくり	森 正 美
2003	Vol.6	論文	ミニコミ紙のある暮らし - 高蔵寺ニュータウン『タウンニュース』の20年	西川 祐 子
2003	Vol.6	論文	イスラームの潰えた夢 - 韓国における布教と現状	安田 ひろみ
2003	Vol.6	研究ノート	非行臨床における治療構造について：行動化の観点から	川 畑 直 人
2004	Vol.7	論文	クアアツの成立を否定する連邦裁判所判決の州裁判所への争点効 - In re Bridgestone/Firestone 判決を中心に -	樺 博 行
2004	Vol.7	論文	都市的共同性とは何か - 都市人類学的研究の可能性をめぐる -	佐 藤 知 久
2004	Vol.7	論文	The American の一研究 -最後の決断をめぐる- A Study of The American -How Our Hero Plays His "Best" Card-	中 窪 靖
2004	Vol.7	論文	精神障害を持つ人を対象としたボディーワークの試み	吉 村 夕 里
2004	Vol.7	論文	森有正の言語論と心理臨床：対話関係における二項関係の日本的性格	鐘 幹 八 郎
2004	Vol.7	研究ノート	心理療法としての自律訓練法 ~クライアントが立ち直る力をどう引き出すか~	佐 藤 安 子
2004	Vol.7	研究ノート	論題「20周年を迎えるプラザ合意」	川 本 卓 史
2004	Vol.7	研究ノート	「シエルマ紀行」	松 田 凡
2004	Vol.7	研究ノート	バルドン祭の現在：ブルターニュ地方フスナンの事例から	古川 まゆみ

(5) その他の学内研究活動

1) 京都文教大学人間学研究所における研究活動

人間学研究所は、1996年の本学開設と同時に設立された。本学のユニークネス、即ち、臨床心理学科と文化人類学科、そして、2004年から新設された現代社会学科の3学科から構成されるという特色を生かした学際的共同研究を推進することを目的としている。

学科スタッフを中心にした共同研究プロジェクトを組織し、学際的テーマを追求しつつ、その成果を内外に向けて発信している。

これまで行ってきた共同研究プロジェクトは、「グローバル・ジャパン」、「宗教と癒し」、「ジェンダー」、「佛教説話と臨床心理学」、「生と死をめぐる学際的研究」、「脳とこころ」、「パフ

オーマンス・アナリシス」、「家族を考える」、「京都論：その多文化的側面から」、「食と癒しの文化」、「文明と野蛮：20世紀を人間学する」などが実施されており、現在では「異文化としての内なる老い」、「ニュータウンの未来像」、「学園ミュージアムを考える」、「『近代』における『制度的知』と『異端』の対面」などが進められている。これらのうちいくつかのプロジェクトについては、後述の研究成果刊行助成制度で述べるように研究成果が刊行されている。

2) 京都文教大学心理臨床センターにおける研究・実践活動

心理臨床センターは、本学が社会に開かれた大学として本学の資源をフルに活用した市民サービスを行うという理念のもとに、1997年4月に開設された一般の方向けの相談機関である。こころの問題はますますその重要性が高まりつつあるが、当センターは本学の臨床心理学科教員の実践・研究の場として、また、本学臨床心理学研究科大学院生の訓練の場として位置づけられた、重要な附置施設としてその運営が行われている。

現在、年間およそ13,000件の相談活動を行っており、利用者数は増え続けている。

主たる活動はいわゆる個別のカウンセリング活動になるが、市民対象の公開セミナー等、特に地域社会にとって有益な活動にも積極的に取り組みを始めている。

2. 研究活動の課題と展望

前述したように、本学における研究活動の特徴点は、1996年の開学以来、主として文化人類学と臨床心理学という新しい2つの学問によって形成される「人間学部」総体としての研究活動を推進することに主眼が置かれてきたことと言える。

このような意図が、前述した人間学研究所紀要「人間学研究」および学部紀要「人間・文化・心」に発表された各種の論文等にもみられるように、一定の成果をあげてきた。

また、人間学研究所における各種の研究プロジェクトは、文化人類学科と臨床心理学の教員が互いの知見を効果的に交流させることを前提とし、基本的には全て学際的研究活動を推進することを目的としてきた。

以上のように、これまでは人間学部総体として、研究活動の推進がはかられてきたものの、その反面、各個別教員の年度毎の研究活動に係る明確な目標設定がなされてこなかったと言える。つまり、各個別教員の人間学部内における研究活動の実態は学内の各種紀要への投稿状況によって推測できるが、学外における研究活動の実態と成果については、各教員の自主的な努力を期待するレベルに留まっているのが現状であった。

今後の本学における教員の研究活動のさらなる発展のためには、やはり個別教員の年度毎の研究活動状況の詳しい実態についての吟味が必要となってくるであろう。具体的には学会誌への投稿・掲載、学会発表、著書の出版、学外での講演活動、科学研究費補助金交付による研究活動の実態（研究分担者としての活動を含む。）等々の事項について、年度毎の数的精査を行っていかねばならないものと考えている。

注意すべきこととしては、これら一連の詳細な点検作業が、単なる教員評価に結びつくだけのレベルに留まらず、教員組織における研究重視の雰囲気醸成を最終的な目的とすべきであるという点にある。また、教員の研究活動の実態は、既に多くの大学でWeb上に掲載され、公開されるべき当然の情報として認知されているが、本学は現在検討段階であり、2005年度からの公開に向けて、大学運営会議で議論を進めている。

本学は開学以来、ほぼ9年を経過するところまで至ったが、この間大学院の設置、大学院博士後期課程の設置、さらには新学科である現代社会学科の設置等、めまぐるしく動きながら今日を迎えている。その中では、設置申請業務等の諸準備に関わる多くの教員が存在した。実際のところ、単純に教育研究活動のみに注力しさえすればよかった教員は数少なく、この意味では教員に過分の負担を強いた面もあったとも言えよう。

しかしながら、昨今の私立大学を取り巻く情勢は、このような言い訳を許すような段階をとうに過ぎ

たのが現実であり、今後は、研究活動と同時に、学内において求められる各教員の責務のバランスをとることはますます難しくなっていくことが予想される。

このような状況だからこそ、各教員には年間の研究計画および個別の研究目標の明確化がよりいっそう求められるものと考え。この意味では、毎年提出が義務づけられている「個人研究費研究・経過・成果報告書」および「同交付申請書」の内容に関しても、その形骸化している現状を改め、各教員の年間研究活動計画が、研究活動を監督する役職者によって精査を受ける仕組みを考えていかなばならないと思われる。

たいへん残念な事柄ではあるが、教員の学外における個人的な研究活動等に関しては、これまでは学内において十分な評価、加えて相応の顕彰が行われてこなかったということを指摘せざるを得ない。これと同様に、博士号の新規取得者に対しての学内的な取扱いについても、適切な処遇を講じることができるよう早急に議論を進めていかなばならない。

当然のことではあるが、様々な学外研究業績の評価基準を設置したとしても、各教員の顕著な学外研究成果に対して然るべき敬意が自然に発生するような「研究風土」を学内に作り出す努力を怠れば、全ては水泡に帰してしまふ。このことを、今一度全ての教職員が真摯に見つめ直し、研究機関としての京都文教大学像を再構築していく必要がある。

研究環境

1. 研究助成の現状

(1) 個人研究費

現在、専任教員（専任講師待遇の附置施設専任研究員を含む。）には、以下のように個人研究費が支給されている。本学では全教員が学部を担当しているため、大学院指導担当の有無によって、個人研究費の総額は50万円から100万円までの間で異なる。前述の専任講師待遇の附置施設専任研究員については、学部担当教員に準じて支給されている。

教員の研究を支える基礎的な研究費として位置づけられている個人研究費に関しては、他学との比較においても、概ね十分な額が手当てされている。

京都文教大学・個人研究費支給額の内訳

学科・研究科	個人研究費(一般)	個人研究費(旅費)	合計
学部担当教員	300,000 円	200,000 円	500,000 円
文化人類学研究科担当教員	100,000 円		100,000 円
臨床心理学研究科担当教員(前期課程)	200,000 円	100,000 円	300,000 円
臨床心理学研究科担当教員(後期課程)	100,000 円	100,000 円	200,000 円

また、各学科予算においては、現在以下の予算費目が手当てされており、特に各教員の担当授業における指導充実のため活用されていることも特記したい。

京都文教大学・授業充実費等支給額の内訳

学科・研究科	授業充実費	地域研究室書籍購入費	合計
文化人類学科専門科目担当教員	130,000 円	80,000 円	210,000 円
文化人類学研究科担当教員	30,000 円		30,000 円
臨床心理学科所属全教員	100,000 円		100,000 円

(2) 研究成果刊行助成制度

年1回、本学専任教員の学術研究成果の刊行を援助すべく「研究成果刊行助成制度」の公募を行っている。

その目的は、本学専任教員の学術研究成果の刊行を援助することによって、本学の学術振興と普及に資することを旨とし、助成対象は本学の専任教員が専門に関する著作を出版する(共著・編著の場合、代表者は本学教員とし、学外参加者は当該著作の執筆者の半数以下とする。)場合で、申請書提出期限までに完成した原稿等を保有する者と定めている。

また、応募者は著作権者であることとしている。なお、本助成の対象外となるものは以下のとおりである。

- ・大学、研究所等の研究機関がその事業として刊行すべきもの
- ・出版社の企画によって刊行するもの
- ・市販しないもの
- ・既に学術誌等に発表された論文を単に集成したもの
- ・科学研究費補助金(研究成果公開促進費・学術図書)を除く、他の学外助成団体の出版助成を受けるもの
- ・学内の他の経費で出版するもの
- ・交付決定日までに刊行するもの
- ・多巻のもの

助成額については、1件につき出版経費の2分の1、かつ150万円を上限とし、年間助成総額の上限を450万円としている。以下に開学以来当制度を利用して刊行された出版物の一覧を記す。(No.13~15については、2005年度中に刊行予定の出版物である。)

刊行助成制度を利用して刊行された図書一覧

No	年度	学科等	著者名	刊行書名	部数	刊行時期	交付額	出版社
1	1998	臨床心理	鶴見太郎	柳田 国男とその弟子たち - 民俗学を学ぶマルクス主義者 -	1,500	1998.12.10	1,200,000	人文書院
2	1998	文化人類	中山紀子	イスラームの性と俗 - トルコ農村女性の民族誌	1,300	1998.3.30	1,170,000	アカデミア出版会
3	1999	文化人類	高山龍三	河口慧海 旅と人と業績	1,000	1999.9.30	967,000	大明堂
4	1999	文化人類	金基淑	インド西ベンガルのポトゥア・ ジャーティにおける宗教的作為	700	1999.10.30	1,374,000	明石書店
5	1999	人間学 研究所	西川祐子 荻野美穂他	共同研究 男性論	1,800	1999.12	1,500,000	人文書院
6	1999	文化人類	鶴飼正樹	人間ポンプ・安田里美一代記	2,500	1999.12.10	1,500,000	新宿書房
7	2000	臨床心理	生駒孝彰他	宗教と癒し	4,000	2000.5.1	1,500,000	三五館
8	2001	臨床心理	鐘幹八郎	心理臨床とライフサイクル論	1,200	2001.9.10	1,500,000	カニシ出版
9	2001	文化人類	鈴木七美	癒しの歴史人類学	2,000	2002.3	1,500,000	世界思想社
10	2002	臨床心理	平岡 聡	説話の考古学	700	2002.7	1,500,000	大蔵出版
11	2002	文化人類	遠藤 央	政治空間としてのバラオ	800	2002.6	1,339,500	世界思想社
12	2002	人間学 研究所	鶴飼正樹 高石浩一 西川祐子他	フィールドワークの方法・京都 論	1,800	2002.5	1,028,500	昭和堂
13	2005	文化人類	杉本星子	「女神の村」の民族誌	1,000	2005.12.10 予定	未定	風響社
14	2005	文化人類	橋本和也	ディアスポラと先住民・民主主義・ 多文化主義とナショナリズム	1,200	2005.9.1 予定	未定	世界思想社
15	2005	臨床心理	森谷寛之他	心理臨床家の育成 - 訓練、教育、 研究	2,000	2005.4.1 予定	未定	創元社

(3) 人間学部海外出張助成制度

年4回、教員の海外学会出席・調査・海外研修を支援すべく、「海外出張助成」公募を行っている。選考・審査については、学内に海外出張助成調整委員会を設置し、助成希望者から寄せられた申請書類を精査のうえ、採否を決定している。

なお、海外出張に係る渡航目的は、学会、調査、会議およびセミナーに限定することとし、その優先順位は、申請者本人が発表者である場合を最優先としている。また、本人が発表者である場合は、その学会参加費も助成対象としている。1名につき上限30万円を支給し、2004年度は総額20人分、合計600万円を予算措置している。以下過去8年間の受給教員数の実績を記す。

京都文教大学・海外出張助成の受給教員数一覧

年度	文化人類学科	臨床心理学科	現代社会学科
1997年度	11	12	
1998年度	8	10	
1999年度	6	6	
2000年度	12	7	
2001年度	11	7	
2002年度	8	7	
2003年度	7	6	
2004年度	5	7	

(4) 文化人類学科海外学術調査奨励金制度

年数回、文化人類学科教員の海外学術調査を支援すべく、「海外学術調査奨励金」公募を行っている。この研究助成制度は、文化人類学科専任教員の「1ヶ月を越える海外での調査研究」を支援し、その成果を文化人類学科において活用・蓄積し、ひいては当学科の授業と研究に生かしつつ、学科教員間で共有すること目的としている。

選考・審査については、学科内に海外学術調査奨励金委員会を設置し、申請者から寄せられた書類を精査のうえ、採否を決定している。1名につき50万円を支給し、2004年度は総額5人分、合計250万円を予算措置している。以下過去9年間の受給教員数の実績を記す。

京都文教大学・文化人類学科海外学術調査奨励金受給教員数一覧

年度	文化人類学科受給教員数
1996年度	1
1997年度	7
1998年度	6
1999年度	8
2000年度	4
2001年度	3
2002年度	2
2003年度	1
2004年度	2

(5) 臨床心理学研究科海外研修旅費

臨床心理学研究科教員の海外における研究・調査・学会活動の一層の充実をはかるため設置されている。各教員の自主的な申請に基づく研究・調査・学会活動を支援し、併せて当研究科の教育研究活動の発展を期すべく実施されているものである。

2004年度は総額120万円が予算措置されている。支給者数・支給額は特に定めず、各申請の内容を臨

床心理学研究科委員会においてその都度審議し、採否を決定している。

以下過去4年間の受給教員数の実績を記す。

京都文教大学大学院・臨床心理学研究科海外研修旅費受給教員数一覧

年度	臨床心理学研究科受給教員数
2001年度	3
2002年度	4
2003年度	3
2004年度	3

(6) 臨床心理学研究科国際共同研究費

臨床心理学研究科教員の海外の心理臨床家との交流を図るべく、国際共同研究費を設置し、過去3年間にわたり韓国・大邱大学校等を中心とした研究者との交流を推進している。2004年度については総額100万円が措置されており、2005年3月中旬に4回目を迎えることになる韓国の心理臨床家との研究交流を実施する予定である。

2. 研究室等

教員研究室の現況に関しては、「第8章 施設・設備等」に詳細な記述があるためここでは多くを述べないが、全ての専任教員・客員教授・附置施設専任研究員に各個別の研究用個室が設置されている。また、2名の研究科長には専用の研究科長室を用意している。

また、各学科には「共同研究室」を設置し、各学科における各種研究会の実施、会議運営、各学科所有の教育研究資料の保管等の目的のため、有効に活用されている。特筆すべきは、文化人類学科において学科特性に基づき設置された「地域研究室」を複数有しており、ここでは各種資料の保管、セミナー・研究会の実施等、当該学科教員による多目的な使用が行われている。

一方、大学院臨床心理学研究科においては、心理臨床教育の実践の場としてケース・カンファレンスを実施するための専用教室を有しており、前述の心理臨床センターにおける教員の実践研究活動とあわせ、心理臨床教育の専門性に配慮した研究場所を準備している。

3. 研究員派遣制度

毎年1回、以下の要領で、教員の研究活動に必要な研究および研修機会を保障すべく、「京都文教大学研究員規程」に則り、研究員制度の公募申請を実施している。申請者は、「研究員派遣調整委員会」による書類精査・選考審査を受け、教授会の議を経た後、正式に承認される。いわゆる「サバティカル・リープ」に該当するものは当制度における「特別研究員」のことを指す。

言うまでもなく、この制度の目的は本学の学問水準の向上および教育の充実発展をはかるため、一定期間研究に専念できる機会を提供することにある。本学では、研究員を以下の3種類に分け、その資格要件と終了後の義務条項についてはそれぞれ異なる。

在外研究員 (6ヵ月以上1年以内)

外国の大学、研究所等において研究調査に専念するもの

本学の専任教育職員として満3年以上勤務し、その間国内研究員の発令をうけないもの、または特別研究員終了後満3年以上経過したものが対象であり、研究期間の終了後、研究期間の2倍に相当する期間は本学に勤務しなければならない。

国内研究員 (3ヵ月以上1年以内)

国内の大学、研究所等において研究調査に専念するもの

本学の専任教育職員として満2年以上勤務し、その間在外研究員の発令を受けないもの、または特

別研究員終了後満2年以上経過したものが対象であり、研究期間の終了後、研究期間の2倍に相当する期間は本学に勤務しなければならない。

特別研究員（1年以内）

研究調査または研修に専念するもの

本学の専任教育職員として満5年以上勤務し、その間在外または国内研究員の発令を受けないもの、または特別研究員終了後満5年以上経過したものが対象であり、研究期間の終了後、研究期間に相当する期間は本学に勤務しなければならない。

一方、大学における教育活動の水準を適正に保つため、年度内に発令する研究員数には以下の制限を設けている。

- ・在外研究員および国内研究員については、合わせて全学3名以内
- ・特別研究員については、全学5名以内

以下に本制度設置以降の研究員一覧を記す。

研究員制度による研究員一覧

No	年度	種類	所属	職位	氏名	研究課題	研究期間	研究機関
1	2001	特別	臨床	助教授	禹 鍾 泰	物語分析と夢分析を通してみた、普遍的無意識（元型）象徴の文化差 - ユング心理学の見地から -	2001.9.1 ～ 2002.7.31	C.G.Jung-Institut Zurich
2	2001	国内	文化	助教授	森 正 美	現代世界における宗教とエスニシティに関する研究	2001.10.1 ～ 2002.3.31	国立民族学博物館
4	2001	特別	文化	教授	西川 祐子	近代日本の日記研究 - 比較文化研究とジェンダー研究の視点から	2001.10.1 ～ 2002.3.31	国際日本文化研究センター
5	2002	在外	臨床	助教授	名取 琢自	分析心理学からみた現代日本人の深層心理 - 夢、箱庭、アクティブ・イマジネーションの探究 -	2002.4.1 ～ 2003.3.31	C.G.Jung-Institut Zurich
6	2002	特別	臨床	助教授	秋田 巖	魔の心理学 - Disfigured hero 試論	2002.4.1 ～ 2003.3.31	
7	2002	国内	文化	助教授	松田 凡	現代アフリカにおける周辺民族と国家に関する経済人類学的研究	2002.4.2 ～ 2002.9.30	京都大学大学院農学研究科 生物資源経済学専攻 農学原論
8	2002	在外	文化	教授	杉本 星子	インドのテキスタイル・インダストリーに関する社会人類学的研究	2002.10.1 ～ 2003.3.31	オックスフォード大学人類学および博物館民族誌学研究科附属社会および文化人類学研究所
9	2002	特別	文化	助教授	奥野 克己	中東ムスリム社会における食のグローバル化	2002.10.1 ～ 2003.3.31	
10	2003	在外	文化	助教授	鈴木 七美	北米におけるエスニシティと身体観に関する医療人類学的研究	2003.4.1 ～ 2003.9.30	マギル大学文化人類学部 Michael S. Blissom, Fumiko Ikawa-Smith
11	2003	特別	文化	助教授	安田ひろみ	韓国のイスラーム教（ソウル・梨泰院および京畿道・広州）に関する現地調査および文献研究 韓国・ソウル城北區の盲人占卜者に関する現地調査 韓国・全羅南道・珍島の民俗宗教に関する調査研究 韓国の食文化に関する研究	2003.4.1 ～ 2003.9.30	
12	2003	特別	臨床	教授	G.C.Couzens	Research in Computer English Aided Language Learning.	2003.4.1 ～ 2004.3.31	
13	2003	特別	文化	教授	金 基 淑	インド・ベンガル地方におけるキリスト教の普及の歴史 キリスト教とヒンドゥー教の宗教的シンクレティズム ベンガル地方のクリスチャン・コミュニティの性格（南インドとの比較）	2003.10.1 ～ 2004.3.31	
14	2003	特別	文化	助教授	古川まゆみ	GARDの現在 = ダーラナ地方の村落調査から	2003.10.1 ～ 2004.3.31	

15	2004	国内	臨床	教授	高石 浩一	インターネットの心理臨床における利用について	2004.4.1 ～ 2005.3.31	龍谷大学理工学部 情報メディア学科 野村竜也研究室
16	2004	特別	臨床	助手	L. Levy	Literacy and Education in Minimal Resource Environments	2004.4.1 ～ 2005.3.31	
17	2004	特別	臨床	教授	鐘 幹八郎	これまで継続的に行ってきた森有正研究を完成させ、著書として出版する。また、著作集の第4、5巻を完成させる。	2004.5.1 ～ 2004.7.31	
18	2004	特別	臨床	助教授	香川 克	児童青年への臨床心理学的援助に関する包括的研究 - 軽度発達障害と養育環境の困難さを中心に -	2004.10.1 ～ 2005.9.30	
19	2004	特別	文化	教授	上田富士子	ケニア・カンバ社会における家族・親族についての研究	2004.10.1 ～ 2005.3.31	
20	2004	国内	文化	助教授	小林 康正	近代日本における国民化と知の編成に関する研究	2004.10.1 ～ 2005.3.31	東京大学大学院 人文社会系研究科 助教授 佐藤健二研究室

4. 研究環境の課題と展望

物理的な観点からは、学園の将来計画が明確化していない現段階で、その将来における研究施設・設備等のビジョンを述べることは難しい。卑近な事例ではあるが、当面、教員個人研究室等の現状に関しては、本学が他学と比較して特段に劣っている点は認められないと考えている。

教員の研究環境を財政的に支援する各種制度に関しても、概ね主要な各種助成制度が設置されており、これら制度を有効に活用した教員研究活動が執行されていることは前述したとおりである。本学の場合、特に海外における各種の研究・調査活動に関しては手厚い制度を有しているものと自負している。

しかしながら、それらの制度とあわせて、日常的な教員の研究活動を側面から支援する仕組みについても検討をはからねばならない段階に至っている。例えば、多くの大学では、いわゆる個人研究費以外に「特別研究助成」、「学会出張旅費補助」、「学会開催費補助」、「学会誌論文掲載料補助」、「教育・研究指導出張経費補助（ゼミ合宿等の経費補助）」というように非常に細かな支援制度を設けている。

教員の研究活動において不可欠と言える、このように細かな経費支出に対しても積極的に支出を行う他学が存在することを考えると、前述の個人研究費制度の将来像とも合わせて総合的な再検討をはかっていく必要がある。現行の本学の個人研究費制度では、大学院教育の担当の有無によって各教員の個人研究費の総額が異なっているものの、同一カテゴリーの教員においては全て均等な個人研究費の支給が行われている。

2. で述べたように、各教員の研究活動の実態を精査していく方向性をとるとするならば、個人研究費の一律支給の是非に関しても必然的に議論は進んでいくこととなろう。即ち、意欲的で独創的かつ斬新な研究計画を提示できる研究者に対しては、従来のような一律支給の枠を越えて、大学からの特別な支援が必要になることも予想される。

他方、こうした新制度の財源確保に関しては、年々厳しさの増す財務状況に鑑みれば、多くを期待できない現実がある。とすれば、こうした「重点支給」的個人研究費の運用方法について、学内における議論を早急に開始する必要がある。

2001年度より開始された各種の研究員制度は、教員の研究時間を半年から1年間というまとまった一定期間の範囲内で確保し、研究活動に必要な研修・調査の機会確保をはかるための本学の中心的制度として位置づけられる。いわゆる「サバティカル・リープ」の字義通りのものとして当制度全体を捉える教員も多いが、本学においては「在外研究員」「国内研究員」および「特別研究員」という3つのカテゴリーを設置して、特に終了後の義務内容、手当面での差別化を実施している。

熱心な議論を経た後開始された本制度は、現在ではすっかり教員間に定着しているが、その運用については各学科における諸事情を勘案して運用上の差異がみられる。文化人類学科では、研究期間は一律6ヶ月間とし、なるべく多くの教員が単年度に当制度を利用できるようにはかっているが、臨床心理学科では、研究員期間は一律1年間の期間で当制度を運用している。

研究員の申請においては「特別研究員」に希望が集中する傾向があり、年度によっては、研究員枠を巡って調整に多大な労力を要することもあった。2004年度に現代社会学科が開設されたことを受け、当

該学科の完成後の2008年からは、全学科教員が本研究員制度の申請対象者となるため、学内教育活動に支障を来さぬための在外・国内研究員について「年間3名以内」、特別研究員については「全学5名以内」という枠の見直しについても、議論を進めていかなばならない。

同時に各研究員期間の終了後に求められる義務条項についても、時代の要請とも言える情報公開を意識したかたちでの再考が求められるであろう。付け加えれば、研究員期間終了後の研究成果を学内で広く周知させる手だてが未整備であり、この期間中に得られた研究成果が学内で十分に共有されるまでに至っていない。数多くの他学で行われている研究員終了後の研究報告会等についても、早急に実施検討をはかりたいと考えている。

以上のように、本学の研究環境に関する全般状況としては、現段階で主要な制度的大枠は手当てされてきたと言えるものの、未だその細部と効果的な運用に関しては課題が多い。今後は、年度毎の各制度の執行状況の精査と、その後の各教員の研究成果との関連を含め、その効果性についても検証を加えていくことが求められるだろう。

研究環境を保障する制度として機能する現行の諸制度を利用する全教員が、当該制度によって享受した研究機会を、本学のさらなる教育研究活動の進展に繋ぐべく、確かな共通意思を持ち得るか否かが、今後はますます重要となってくるものと考えらる。